

佐野経彦の思想形成

井上順孝

1. はじめに

佐野経彦が、小倉に神理教会を結成し、のちの教派神道十三派の一派となる神理教の組織的基盤を築いたのは、明治13年のことである。彼の父、佐野経勝は、甲斐国二宮神主栄名井聡翁⁽¹⁾によって神道を学んだとされ、この父の影響を強く受けながら育った経彦が、幼児期より神道への関心を抱いたことは、想像に難くない。しかし、たんに神道に関心を持つにとどまらず、一家の説を立てて、これを世に広めようとするに至ったことで、経彦は、幕末維新期の宗教的磁場に、一つのベクトルを持ち込んだことになった。

彼が宗教家としての生涯を送ることを決意したのが、いつのことかというのを厳密に確定するのは難しいが、自らの宗教的使命を確信するのは、明治8年から9年にかけての一種の神秘体験を経た頃であると言ってよかろう。しかし、この神秘体験は、いわゆる典型的な回心体験ではなかったようである。⁽²⁾『神理教祖御小伝』には、そのときのありさまが、次のように記されている。

明治八年の冬より九年にかけて不思議なる霊告また夢想をたびたび受けたまひしことの止まされば始めの内は禍神のまがはざか又精神の迷ひならむとすてたまひしも明治九年十月十六日神々示現したまひて汝は神の心じゃ救世安民を汝に托す誠を明にせよ汝のため又誠を守るものゝ為に守りつかはずぞとて頭れたまひしは日神さま次に月神さま又其次には土神頭れ土地を守り五穀をそたてやらむ次は木神あらはれ木の事に幸してやらむと誓ひ次に水神頭れて水を与えて水難を守らむそちの水難を救ふたも此方のしはざじゃ次に火神頭れ火を幸して火難を助けてやるそのしるしは今にあるぞと次に金神頭れたまひ金を与へて世を融通してやると誓ひをたてられ次へゝと神々頭はれてその功德を与へて福德をさづけるそ霊を救ふて神となしてやる汝代神となれ今より明誠代神といへと不思議なるに示頭ありたりかく奇蹟弥重なりければ今はとて心を定めたまひて……

(11~12頁)

約1年ほどの間に何回か、霊告あるいは夢告という不思議な体験を重ね、最初は迷いを感じていた経彦も、やがて自分に課せられた使命の中に身を置くことを決意したということのようである。霊告とか夢見というのは、人間が宗教的世界にリアリティを感じる場合の導入路としては、もっとも一般的なものの一つである。非日常的世界を垣間見たことを

きっかけに、宗教家として生きる運命を感じた教祖は少なくない。

ところで、そうした非日常的体験にさらされた人間は、通常、その体験の意味を自ら問いかける。なぜそのような体験に襲われたのか、それに自分はどうか対処しなければならないのか。引用文から判断すると、経彦は、この神秘体験を最初は禍津神のなす業か、あるいは精神が迷ったかと疑ったが、しかし、日月の神の他、いわゆる五行の神が現れたことによって、疑いを乗り越えたということのようである。けれども、このときの疑いがどれほど深刻であったか、また、自己の使命についての確信が劇的なものであったかどうか、あるいは、この体験をめぐる心的葛藤の具体的内容がどのようなものであったか、などを知りうるような細かな記述は、資料としては残されていない。ただ、自らが特殊な使命をもつ人間であるとの認識が、この頃固まったのだけは確かと考えていいであろう。

教祖の宗教体験、とくに後世になって、それが立教に直接的につながると解釈されたできごとについては、その体験の重みが過度に強調されることも少なくない。ときにそれは「回心物語⁽³⁾」と呼び得るような一連の物語の形成へと至ることもある。回心体験は神秘的な装いに包まれることが多い。しかし、その人物が宗教的な道を歩むに際して、決定的な意味をもつような一連の体験のさなかに発せられた言語、あるいはその体験を描写しようとして語られた言語の中には、彼(女)が、それまでに遍歴してきたさまざまな思考の蓄積の一部が噴き出しているとみることもできる。

言い換えれば、神憑りなどを典型とする宗教的回心は、社会的な場で考えれば、その人の宗教的活動の出発点であることが多いが、思想的な蓄積という面から言えば、むしろ一つの到達点を示していると捉えられるということである。少なくとも、その人物の宗教活動を支える思想の基本的部分はある程度固まっているのではないかと考える。さらに、突発的でない回心の場合は、その段階での思想の完成度は、より高いものではないかと推測される。

教祖が、教団という組織体の場において、大きな影響力をもつようになると、当然、その思想にも、それに応じた展開が考えられる。そのことによって、当初の目的とか、理念とかが変質していくこともあるだろうが、多くの場合、基本的な部分は連続していると仮定するのが、さしあたっての研究の手立てであろう。事実、経彦のような緩やかな回心の場合は、連続性は、より明瞭に読みとれる。

経彦の思想形成上の区切りを明治8、9年の頃のみ限定することはできない。ただ、ここでは、宗教家としての人生の選びとりをこの時期のこととしているという、経彦自身の自己了解が、何よりも重要な意味を持つという立場に立っているのである。以下においては、とくに、どのような要因が、この頃までの経彦の思想形成に重要であったか、ある

いは、彼はそもそもどのような思想的土壌に育ってきたのか、という観点から論を進めることにする。思想的土壌といった表現をすると、そこには、経彦が直接、間接に受けた、日本の文化的遺産としてのさまざまな宗教思想も含まれてくる。それについての考察も当然なされなければならないが、ここでは、差し当たって、経彦がその生活体験の中で、特定の人物や事件から、直接学びとったものに限定したい。

2. 不完全教祖 — 従来の経彦像

神理教という教団が、今日それほど大きな勢力をもたないことも一因かもしれないが、この教団の沿革についてのまとまった研究はもちろんのこと、教祖経彦がどのような生涯を送ったかについての本格的な研究も皆無に等しい。教派神道研究は、大正時代から目立ち始め、昭和初期には一つのピークを迎えるが、その前後に刊行された研究書にあっても、神理教の扱いはそれほど大きくなかった。当然、経彦の伝記的事実についても、深くつこんでこれを研究したものは見当たらないが、彼が宗教家として活動するようになった経緯をどのように捉えているか、確認しておくことが必要であろう。

まず昭和7年に刊行された、中山慶一著『教派神道の発生過程』⁽⁴⁾の中では、経彦が宗教家となる経緯に関しては、ごく簡単に触れられているのみである。この中で中山は、経彦が神理教の開祖になったプロセスを次のように捉えている。天在諸神を奉斎し、神道の禁厭祈禱をなす家に生まれた経彦は、学問を重ね、やや長ずるに及んで、饒速日命の遺教にふれ、次第に国粋的な思想に目覚めた。やがて尊王倒幕運動に関心を持ち、諸国を遍歴した。しかし、彼の母が老齢となり、彼の外出を好まないようになったので、孝行心篤い経彦は、外出を中止し、孝養傍ら「信仰道統の祖述発展」に傾倒した。これが後年神理教の開祖となった動機であるというのである。

また、「されば彼の信仰は内性の止むに止まれぬ欲求として起ったと言ふよりは、凡ての外的事情が整備して殆ど必然的な状勢の中に促されて起これるものゝように思はれる」と解釈している。こうした思想信仰をもった人物が、明治維新の中で、神道の興隆、次いで、仏教の復興、キリスト教の復活という事態を前にすると、「単なる述作のみを事とするにしのびず、積極的な街頭宣伝に向はしむるに至れる事も亦当然の成行き」とであると解されるのである。

中山は、経彦が教祖となる過程において重要な要素として、経彦が研究した伝統的道統、時代の潮流に影響された愛国尊王の思想、仏教・キリスト教に対する強い排他的感情を挙げている。この三つの要素は、重要であるが、これに尽きると考えるわけにはいかない。

また、この三つの要因についても、とくに詳しい説明はなされていない。中山は基本的に、経彦の宗教的獨創性という点については、あまり高く評価していないようである。

続いて刊行された、田中義能著『神道神理教の研究』⁽⁵⁾も、伝記的事実については、教団側の資料のごく簡単な要約・紹介のみである。田中は、教派神道十三派各派について、それぞれ一冊ずつ概説書を著しているが、いずれも、資料的にはほぼ全面的に教団の刊行物に依拠し、見解も教団側のものを大体そのまま受け入れている。従って、当初からこの書のもつ限界は明らかである。経彦の生涯についても、彼が宗教家になった経緯を、ごくかいつまんで述べてあるだけで、どのような要因が、経彦が宗教家となるに関わったかというような視点は欠如している。

鶴藤幾太著『教派神道の研究』⁽⁶⁾においても、経彦が宗教活動を開始する経緯については、伝記からの要約という形で、ごく簡単に叙述するのみである。宗教家となった直接的契機としては、幕末の政情不安のおり、「邪教」、すなわちキリスト教が蔓延して、神道が振るわれないのを見て、それまで医者をやっていたのが、「肉体の病を医せんよりは、広く天下の民心を救はざるべからず」と決心したことを挙げている。また、明治8、9年の靈告、神告も重要視している。

しかし、鶴藤も、宗教家としての経彦を余り高くは評価していない。明治8年から9年にかけての靈告についても、「経彦には幼より靈感的の素質があったのかも知れぬ。然しながら、神理教が天理教や金光教と同一の天啓教たらん為には、教祖は余に学者的であり過ぎた。」と評している。学者的であり過ぎたと言っているけれども、他方で、経彦の著述は宗教的信仰にとってはほとんど無用であり、とくにその言靈学は煩瑣複雑で、ほとんど理解に堪えないと、厳しい評価をなしている。また、経彦の思想については、『陰陽道のみならず、平田系の神道説は固より、尚特異なる言靈学、複雑なる来世観に加ふるに、天理教・黒住教的要素を以てし、頗る雜駁なるものである。』と特徴づけている。経彦の思想が複雑な要素を含んでいることを指摘するが、その中にも獨創性があったのではないかという視点はないように見受けられる。

他方、戦後の研究書が、これら戦前の研究成果に、新たな視点、あるいは新たな資料を加えていったかという点、そのような研究の蓄積はなされていない。神理教の研究それ自体がまったくといっていいほどなされなくなった。当然、経彦についての評価にも展開は見られない。ラベル貼りのみが先行して、不適切な記述が加わる場合も出てくる。

小口偉一他「民衆宗教の類型」⁽⁷⁾では、神理教を「古神道的な呪術・行法を伝える神道家が、明治政府の神道国教化政策に即応して教義を整備し、教化機関としての性格をもつ教団を形成したものである。」と特徴づけている。これは、間違いとは言えないにしても、

かなり不正確な記述である。明治政府の神道国教化政策に即応して教義を整備したと述べてあるが、彼の処女作『天津皇産靈考』が著されるのは、安政元(1854)年である。すでに幕末期から著作活動は盛んに行なっていた。その頃から、彼の教えの中核的部分は形成されつつあったと見るべきである。明治政府の宗教政策が、彼のその後の行動や思想にさまざまな影響を与えたことは確かであろうが、彼自身の中に連続するもの、あるいは、むしろ政府の方針を批判しながらも貫徹させた部分が見られるのであり、そうした点に目を配らず、ただ受動的な面を強調するのは問題が多いと言わざるを得ない。

また、村上重良『国家神道と民衆宗教』⁽⁸⁾では、「幕末、筑前国において巫部系の神道を布教し、藩の圧迫を受けた医師佐野経彦の神道説は、明治初年に神理教を形成した」とある。経彦の生まれ育った所は豊前であるから、筑前をも活動範囲にしたにしても、この記述は間違いである。また、幕末に布教を開始したというふうにとらえていいかどうかについても、検討が必要である。

これらを並べ比べてみれば分かるように、宗教家としての経彦の評価は、概してそれほど高くない。例えば、宗教家になった動機、あるいは過程についても、これを、彼の内的なるものの高まりの結果、必然的に宗教的世界に向かうことになったと解釈するよりも、彼の置かれていた境遇、及び時代の状況の方を上司する見方の方が主流である。また、その教えにしても、独自性を認めるものは少なく、寄せ集めの教義、あるいは、明治政府の宗教政策に即応させてできたものというのが、大方の評価である。

宗教家としての評価があまり高くないということの背景には、これらの研究者が、教祖の典型像を、いわゆる民衆宗教の教祖、すなわち、中山みき、赤沢文治、あるいは黒住宗忠といった人物に求めていることも関係していると考えられる。また、経彦の思想が独自性に乏しいと評価される理由の一つとして、彼がいわゆる神憑りの現象を体験せず、自らか神と一体化したという意識の中で、言語を表出したことがないということも挙げられよう。つまり、宗教的回心によって、新たな宗教的境地を開き、その幾分神秘的にして独創的な境地を人々に語り、これによって民衆の宗教的意識を高めたとされる、民衆宗教の教祖像からは、少しずれると捉えられているのである。

このように、これまでの佐野経彦研究は、彼を中心的対象とした緻密なものではなく、多くは、民衆宗教の教祖を描くなか、それらの亜流あるいは不完全な教祖形態の例として補足的に論じられてきたに過ぎない。言い換えれば、経彦の宗教者としての評価も、十分に資料的検討がなされた上でのものではないということである。

これまでの研究は、経彦の思想形成にどのような要因が関わったかということについて大体的見取り図を提出してはいるが、その細かな検討、相互の関係についてはほとんど考

慮していない。経彦が教祖としては、創造性に欠けるといった見方は、果たして正しいのか、といったようなことも問いとして提出することが必要に思われる。こうしたことを考える場合、神道にアイデンティティを求めながら、宗教運動を展開する際の思想的な体系化の困難さということを考慮しなければならない。

神道的な伝統は通常は、非常に規制力の弱いものと考えられる。思想的側面はとくにそう思われている。だからといって、神道的な思想の展開が自由自在にできるわけではない。やはりさまざまな枠が存在している。従って、神道の伝統の土壌の上に、新たな運動が形成される場合にも、この枠組は生きている。ドグマ的な形で絡むことはないが、それでも外れることのできない教え、倫理がある。それ故、こうした運動の指導者は、特定の宗教伝統から自由な立場で運動を展開する人間とは異なった場に置かれている。そこでは、教祖がすべての始点に置かれるわけではない。ひきついできた伝統との関係を明確にし、その中で教祖自らの位置づけを求めていかなければならない。この緊張関係を考慮に入れることなしに、いわゆる民衆宗教の教祖との比較において、独創性という基準を単純に持ち出すわけにはいかない。

従来の経彦研究は、きわめて不十分である。そこで、彼の思想形成を検討するには、まず、教団側の資料を素材として、これに参照できる傍証資料をつき合わせていくという、きわめて基本的な作業から開始しなければならない。

3. 立教前の経彦 — 教祖伝の描き方を中心に

教祖伝を含めて、教団の歴史及び教祖の思想を扱った、教団関係者による刊行物としては、藤紅伊佐彦著『教祖様の面影』⁽⁹⁾、佐野豊著『教祖の道統』⁽¹⁰⁾、上記の佐野高嶺編『神理教祖御小傳』⁽¹¹⁾などがある。また『神理教祖御日誌第一巻』の冒頭には、経彦自身が記した原稿をもととした履歴が収められている。この他、書籍ではないが、明治31年、ときの内務省に対して提出した「調査事項報告」⁽¹²⁾という書類があって、これも多少役に立つ。

これに加えて、もっと基本的な資料がある。それは経彦の日記である。彼は明治以降、かなり丹念に日記をつけている。その内の一部は、「田川紀行」「崎山紀行」「東行記」「熊本日誌」「千代田日記」などとして、教団によって、単行本の形で、あるいは、機関誌『神理』⁽¹³⁾に連載という形で公にされている。

これらのうち、佐野豊によるものは、大部であるが、経彦の思想を解説した部分が大半で、伝記的事実についてはほとんど頁を割いてない。生涯の事蹟に関しては、『神理教祖御小傳』が基本的事柄を簡単に述べてあり、藤江伊佐彦のものが、逸話的なものを補って

あると考えればいい。また、日記によって、彼の性格や行動、また接触した人々の名前が細かく分かる。

『教祖様の面影』を著した藤江伊佐彦は、神理教の大教正となった人物である。経彦に初めて会ったのは、明治30年1月であると述べている。経彦にとっては晩年である。その後、経彦の近辺において、教祖の言行を直接に見聞しているようである。経彦がどのようにして人々に接したか、どのように教化したかについて、いくつかの実例を挙げてもいる。そういう意味では、伝記作者としては、かなり適切な立場にあったと言えよう。

教祖の伝記の常として、教祖を神格化した記述は避け難いが、経彦の伝記には、それほど驚くようなこと、つまり奇跡譚の類はあまり見られない。既に世が幕末維新时期であったという時代的な問題もあろうし、また、経彦自身の行動が、概してそれほど突飛でなかったということもあろう。ただ、いくつか、生涯の中で強調されている出来事というものがある。幼年期から青年期に至る伝記は、どの書においても、取り上げられている逸話はほとんど同じ素材である。主に経彦自身が語ったことを、周りの人がまとめるという形で伝記が編纂されたからであろう。その場合、取り上げられている逸話が共通で、その出来事についての意味づけが非常に似通っているということは、経彦自身が、自分の半生を振り返った際、それまでのどのような出来事が、宗教家としての自分に重要であると考えていたかが、そこに表現されていると解釈することができる。

経彦の生年は、天保5(1834)年である。佐野経勝、佐陀の長男として、2月16日の朝日の出に誕生したとある。幼名は左吉麿、のち右吉麿、さらに右橘と変え、最後に経彦と称した。

さて、教祖の出生に対しては、往々にして特別の意味を付与されることが多いが、経彦の場合も例外ではない。経彦の誕生が、やはりなにかの神秘的色あいに包まれていたことを伝記は伝える。藤江伊佐彦『教祖様の面影』には、次のように書かれている。

然るに、御年六十にして未だ御子がないので、御夫婦はいたく心にかけられ、一心に子を授かるように、天在諸神に御祈をこめて居らるる内、一夜、光物が御懐に入ると夢ありて御妊娠となり、ここに初めて教祖様が御誕生になりました。(9頁)

経勝は、娘2人を得たが、1人は15歳にして夭逝した。しかし、男の子が欲しくて天在諸神に祈って経彦の誕生を得たのである。神に祈って子を授かるという考えは、とくに珍しくもないが、「光物」が母親の体内にはいって、妊娠したというのが、神話化と言えば、神話化であろう。

「調査事項報告」には、また次のように記載されている。

始女二人ヲ生ム男子無ヲ患ヒ天諸諸神社及粟嶋明神ニ祈願シ後六十一ニシテ靈告ニヨ

リ一男ヲ生ム

内務省に提出する書類であるから、少し表現を抑えたのかもしれないが、それでも、神に祈って授かった子であること、神よりの靈告があったことを記している。

出生に関して、こうした不思議話を伝えているが、少年期の経彦についての記事は、彼が神あるいは、宗教的世界と深い関わりの中に生きる運命にあった子供であることを表現しようとするものが集められている。ごく小さい頃の経彦の性格の描写した例として、『教祖様の面影』の中に次のような記述を見出すことができる。

梅檀は双葉より香しと申しまして、御教祖様は三四歳のころより本を読み字を書く真似をなされ、五六歳のころより一度見給いし事は十分に見極め、一たび御聞きになりました事は得心のゆくまで問い返し、一ぺん覚えになりし事は、いつまでもお忘れになりません。又、その頃から、他の小供に物を分ち給うにも、良き方を他の子に与え御自分には悪しき方を取られる等、萬事の総てが非凡でありましたから、世間は“神童よ”とひそかに敬服していたそうでございます。(8-9頁)

小さい頃より読み書きが好きであったこと、記憶力が人並み外れてよかったこと、思いやりがあったこと、それゆえ神童とみなされたことが記されている。とはいえ、ここにはいわゆる「神秘的」な要素をとりたてて強調するような書きぶりはない。

きわめて不思議な出来事であり、そしてそれ故、これは経彦が神の申し子であることの証明だったのではないかと、どの伝記にも語られているのは、天保11(1840)年8月16日、経彦が数え年7歳であったときの、紫川での事件である。ことの顛末はこうである。この日、経彦は父に連れられて、隣村の八幡社に参詣した。ところが俄に大雨が降り出して、途中の紫川が増水した。参詣の帰りに、この紫川にかかった橋を渡る途中、経彦は、足を踏みはずし、川の真ん中に落ちてしまった。かなりの激流であったため、父は非常に驚き、堤つたいに探したが見つからない。「天在諸神よ助け給え」と念じつつ川下の方へ行くと、およそ5丁余り下手に行った所に、経彦が平然と立っているのを見付けた。

父は驚きかつ喜ぶが、経彦に少しの怪我もなく、また着物も半分は濡れていない。不思議でならず、どうしたことかと聴くと、経彦が言うには、流れに吞まれてまもなく、川の中から十人の子供が現れ、自分をここへ運び、そのまま消え去ったということである。

この出来事は近辺でも有名になり、「神童である、奇跡である」と言いはやされたそうであるが、経彦自身も、このできごとには、幼心にも深く「神明の徳」を感じた。そこで、日頃遊ぶ際にも、子供たちを集めて自ら大将となり、山上や川の近くで、神を祭る真似をするのを唯一の楽しみとしたと『神理教祖御小傳』にはある。

もう一つ、12歳のとき、父の眼病を癒やすため、山城の嵐山にのぼって祈願をした話

も、経彦の信仰心が、いかに少年離れしていたかを示すものとして、紹介されている。やはり『教祖様の面影』によって、それを述べると、こうである。

弘化2(1845)年、経勝は、眼病にかかり、日々痛みを増していた。経彦は、これに深く心を痛めていたが、かねて父より聞かされていた話を思い出した。昔慶長の頃、細川越中守忠興が豊前・豊後の大守であったとき、眼病となった。薬も効き目がなかったので、徳力山(神理教の本院)の奥宮に祈ったところ治癒した。そこで、御礼として、お宮を立て、山城の嵐山の桜を移し植え、この山を嵐山と名付けたという話である。⁽¹⁴⁾

そこで、経彦は9月28日の夜半、密かに家を出て、嵐山の造化大神宮にこもり、祈念した。家族は、心配して探し、ようやく翌日見付け出す。なぜ、黙ってこのようなことをしたのかという問いに対し、経彦は、家出して心配させたのは申し訳ないが、もし、相談すれば幼年ということ許しがなかったであろうから、止む無くこうしたと答える。そして、家に帰れとの説得を聞き入れず、祈念を続ける。

30日の夕方になって、経彦は意気揚々として、満面に笑みを含み帰ってくる。すると不思議なことに、先程まで痛みが激しかった父の眼病が、たちまち治ったという。そして、このとき初めて経彦は、細川忠興の故事にならって山籠もりをしたことを打ち明け、一同はその孝行心の深さと信仰の篤さに驚嘆したという。

父親の眼病を治したこと自体は、一種の奇跡譚になろう。しかし、伝記の意図は、奇跡の結果よりも、このように信仰心の篤く、実行力の伴った経彦像を描くことに主眼があったと思われる。経彦の宗教家としての才覚は、すでに少年期より芽生えていたことを指摘するのが、主目的であろう。

少年期の記述としては、あと、その人格者ぶりを示すものが一、二提示されるだけで、以上のことに、ほぼ伝記の意図は尽くされていると思われる。要約するなら、次の4つにまとめることができる。①神の申し子としての出生、②生来的な宗教心の篤さ、③神の守護、それに④少年期にかなり完成されていた人格。

こうして少年・青年期の経彦には、後年宗教家として歩むべき準備がすでになされていたという描き方がされている。このことは、経彦が一人の教祖として世に現れることの必然性を示したのだとも解釈できる。だが、他方、これが経彦自身による自分の半生についての自己理解であったということを考えるなら、彼自身が自分の宗教的側面における神道思想、行動に一貫した面があったことを強く意識していることの証拠とも解釈できるのではなかろうか。

4. 出自とアイデンティティ

経彦の父経勝は、神道を広めるということに関しては、かなり志の篤かった人のようである。彼の経歴及び思想的背景については、あまり詳しい資料はないが、「調査事項報告」には、次のような記載がある。

常ニ俳諧ヲ好ミ梅ヲ愛ス梅守ト号ス企救真砂ノ作者一人也家ニ傳ル五十言傳其余右傳ノ神書アルヲ喜ヒ教法ヲ起シ武家ノ威権ヲ破ラン」ヲ謀リ甲斐国ニ官神主榮名井総翁ニ從ヒ神道ヲ学フ故有テ甲斐国ニ逃ル後国ニ歸リ富野ニ在事半年ナリ能リ父ニ仕ユ豊前官詣徳力年中行事等ノ著アリ

ここに出てくる榮名井総翁は、冒頭に名前を挙げた榮名井聡翁(1733-1814)のことである。経勝はこの聡翁から、かなりの影響を受けたと思われる。深山忠六「甲斐の神道」⁽¹⁵⁾によると、聡翁は、甲斐の神道家であり、垂加神道の系統の国学者加賀美光章(1711-82)の影響を強く受け、寛政元(1789)年、家督を長男に譲ってより、諸国を歴遊して神道を講じたという。経勝はこの聡翁の門人になったと思われる。「甲斐の仏敵先生」というあだ名があったと伝えられる聡翁の激しい神道布教のエネルギーは、経勝に大きな影響を与えたと考えられる。

経勝の思想に、この父親の影響がどれほどの割合を占めるのか、それを推し測ることは難しいが、父親の精神を継承するという意識は、経彦の中に強くあったことが知られる。また、伝記においても、父親と経彦との思想的、また性格的なものの連続性を描こうという意図が見える。

たとえば、経彦は、他人を思いやる心が非常に篤かったとされるが、父経勝もそうであったとされる。『教祖様の面影』には、そうした例をいくつか挙げてある。すなわち、経勝は、自分の家が火事になったとき、火が盛んに燃え上がるのも構わず、御宮に行き、「どうぞ我が家のみですみますよう、他へ類焼せぬようにと御祈念なされた」という。また、生きものを非常に憐み、薪の中にもし蜂の巣でもあると、これを庭の生木の枝にくくりつけたりしたという。短いエピソードながら、他者あるいは他の生物を慈しむ心に満ちた人間であったことを印象づけようとしているのが伝わってくる。

経勝は、安政2(1855)年7月に81歳で死去するが、死を目前にしたとき、我が子経彦に対し、「殊に我が家は神道を興して皇国のため大いに尽すべき家なり。我が神国も、やがて時の来る事、遠からず。汝、よろしく心せよ」という遺言を残したという。また、『神理教祖御小傳』には、長い眠りにつく直前に、次のように告げたと記されている。

汝終身大志を懐きて少量の心を持つべからず朱に近くものは赤く墨に近くものは黒し
仮初の事にも友を撰べ博く学を修めよ彼史記李斯伝にも小を顧みて大を忘るれば後必
ず害ありて狐疑猶予すれば後必ず悔いあり断じて敢行すれば鬼神も之を避け後成功あ
りとあるに非ずや（ルビは省略）
（ 6 頁）

このできごとを経彦が心に刻んでいるということは、学問を重ね、神道を興隆するとい
う志は、父より受け継いだものであるという意識を、彼がもっていたことの証拠と考えな
ければならない。

経彦が、父親から継承したものが、具体的には何であったか、これは大変に確定の難し
い問題である。臨終の際の遺言に示されるような、大志を抱けとの方針は、おそらく、小
さい頃よりの教えであったと思われる。知識を広め、大きな事をなす人間に育てたいとい
うのも、父の終生の願いであったと思われる。だが、そうした一般的な方針ではなく、具
体的にどのようなことがらを父から教わったかということになると、五十言伝、あるいは
家伝の神書についての手ほどきという程度しか推測できない。

ただ、もっとも重要であるのは、経彦が自分は巫部の道統を継承する人間であるという
意識を強く植えこまれたということである。巫部の道統とは、佐野家が饒速日命を初代と
して、連綿として続く家柄であり、経彦はその第77代に当たるというものである⁽¹⁶⁾。その
系図が先の報告書にも記載されている。もちろん、この系図は、その内容からして、その
まま信すべきものではない。しかし、経彦にとっては、これはすべて事実として受け取ら
れていた筈である。そしてこの家系によって確立されたアイデンティティは、経彦が自ら
の使命を了解する上に、大きな力をもったと考えねばならない。

五十言伝などの家伝の書を父より教わったということの重要さも、これによっていや増
すわけである。これらの書が、実際は歴史上でのどの時点で作成されたかはさておいて、
彼の中に自分は古来からの日本の宗教伝統を再興するという思いが芽生えた、という効果
にここでは注目しておかなければならない。父親の影響その他によって形成された、彼の
宗教思想については、別個に論じる必要があるのだが、ここでは、そうした経彦のアイデ
ンティティそのものが、彼の宗教活動に強い影響力をもったことを指摘しておきたい。

5. 西田直養への師事

佐野経彦は、青年時代に、小倉出身の国学者、西田直養に師事し、その影響をいくらか
受けたとされている。経彦自身もそう述べているし、教団関係者の認識でもそうである。
経彦の思想形成に当たっては、父親と共に、この直養の与えた影響についても考察してお

く必要があろう。

西田直養は、小倉出身の国学者であるが、まだ本格的な研究の対象となったことのない人物である。伝記的事実についても確定しえない部分が残っている。おおよそのところは次のような略歴である。

寛政5(1793)年に、小倉藩士高橋元義の四子(二男)⁽¹⁷⁾として生まれるが、のち西田直亨の養子となる。幼名は庄三郎、浩然と号した。36歳のとき勘定奉行となり、次いで、町奉行、寺社奉行取計などの職も勤めた。また、江戸に在勤となったり、京都、大阪の留守居を勤めたりした。最後には用人格となったとある。⁽¹⁸⁾没年については、説が分かれるが、慶応元(元治2年)年3月死去が通説となっているようである。⁽¹⁹⁾

この間、江戸で太田錦城に学び、和歌を秋山光彪に学んでいる。著書も『金石志』、『古事記集解』、『萬葉集長歌格』など、数十冊あるとされている。

伊東尾四郎は、⁽²⁰⁾「西田直養略傳」という論文の中で、直養は、本居大平派の国学者であるという、従来の説が間違っていることを指摘した上で、その伝記的事実について、若干の言及を行っている。

それによると、直養は、最初は漢学を学んだが、30歳の頃より専ら本学(国学)の道にはいった。しかし、漢籍を捨てたのではなく、ことに論語は終生座右の書としたという。本学も、最初はいわば和歌和文の学にとどまっていたが、やがて、江戸において、平田篤胤と出会い、篤胤と親しく行き来するうちに、その影響を受けたようである。伊東は、「単に歌人たるは一向につまらぬ事なり、宜しく古書古伝を研究すべしとの平田の意見は、翁をして国学研究の意志を益々深からしめしものなるべし」と述べている。

直養は、この他、大国隆正、鈴木重胤、屋代弘賢、伴信友などの国学者とも交際があったようである。これらの国学者たちの性格描写などを行っていることから考えても、幾度か交流があったと思われる。

彼が晩年もなお、なかなか激しい性格の持ち主であったことを思わせる一つの逸話がある。それは彼の死の原因に直接関わるものである。すなわち、『大阪人物誌』には、次のような記載がある。

文久三年会々本国に在り時に長州藩事を外国に構へ遂に砲火を交ゆるに至る小倉藩多く佐幕論に傾き傍観敢て長藩を援けず直養大に憤慨し絶食以て命を殞す後其忠志を追悼し祠を建て壺を祀り号して東紫神社と云ふ (新字体を用いてある)

これは、文久3年に、長州藩がイギリスやアメリカの艦隊と砲火を交えた事件で、小倉藩が、援助をしなかったことを直養が怒り、絶食によって死去したというものである。この説は、確実な史実とは言い難いようで、他に病死という説もある。どちらが正しいのか、

決定的な証拠は今のところ乏しいようである。しかし、このような説が流布したということに、晩年においてもなお血気盛んな人物であったことが推測されるのである。

さて、経彦が直養に入門したのは、嘉永3(1850)年、彼が17歳のときである。経彦自身の記したところによれば、「同(嘉永)三年庚戌二月二日西田直養翁(小倉殿人番頭士大将也)国学学ぶ、翁は父の縁故ありてなり」とある。また、翌年の項には、「直養翁の著書神靈考を披き、著書の国家に有益なる事を悟る」とある。直養の著作活動を見て、刺激されるところがあったと考えられる。

経彦は、安政2(1855)年に、長崎に行っているが、これは攘夷の志と関わりがあり、また、この件について直養に相談したことが書かれている。青年期の行動において直養が与えた影響は、少なからぬものがある。伝記においては、経彦が直養よりも優れた人間であること、しかし、それにも拘わらず、経彦は直養を終生尊敬していたことが述べられている。直養の影響をどの程度のものとするか、教団側でも難しい点があると思われるが、多感な青年期の経彦にとって、大きな存在であったことは疑いを入れない。

直養は、死後蒲生八幡神社の境内神社である、幸彦社に祀られた⁽²¹⁾。幸彦社は、慶応三年八月の創立(『小倉市誌』)となっているが、『神理教祖御日誌第一巻』によれば、経彦が官許を得て、幸彦社を創立したことになる。また、経彦は、生前、この社の春秋の祭を必ず行い、神前で歌会を催したという。このことだけでも、経彦が直養に対し、相当の敬意を払っていたことが明らかである。

国学思想との接触は、主に直養を通じてなされたと思われる。直養は、平田篤胤に会い、その影響を受けたと言われる。経彦の叙述の中には、ときどき篤胤の名前が出てくるが、それはたいてい、賛辞を伴っている。細かな教義に関しても、篤胤の思想の直接的影響と思われるところがある。皇国思想などの形成に関しては、父親の影響と直養の影響と、どちらが大きいのか判断はできないが、両者が互いに増幅作用を果たしながら、経彦に影響を及ぼしていったという見方にとどめるしかないであろう。

父親、直養の他にも、経彦が影響を受けたと思われる人物は何人かいる。高杉晋作、平野国臣、真木保臣などのいわゆる幕末の志士とも交わりをもったようである。しかし、このつきあいがどのような直接的影響をもったかは、不明である。推測されるのは、こうした人々との付き合いによって、いわば「憂国の士」的な行動には一層拍車がかかったのではないかということである。

6. 皇国医道

父の経勝が死去したのは、安政2(1855)年、経彦が数え年22歳のときのことである。その10年後の、慶応元(1865)年に母の佐陀が死去している。経彦にとっては、この母親の死の方が精神的に大きな衝撃であったようである。伝記には、経彦が母の晩年に母の健康を気にしてあまり外出しなかったこと、また母の病を直そうと医道を学んだことが伝えられている。

『教祖様の面影』には、母親が年をとり、経彦が遠くへ出るのを嫌がるようになり、経彦は忠と孝の間で悩んだことが記されている。つまり、志士としての活動を続けるか、子として母に孝養を尽くすかの間においてである。そうしたある日、神前で思案してのち、「我は大いに過れり。今や天下の一大事の秋にはあれど剣を執りて立つも将何かあらむ。他に人に乏しからず。宜しく別途に向って猛進せよ。自ら適路あり。これ忠孝両全の道なり」と感得し、以後母親の孝養に努めたとある。ところで、このとき、老齡の母親は持病に悩まされており、これが経彦が医道を学ぶ契機になったとされている。この記述をそのまま引用している研究書も多い。

しかし、実際に、いつ頃から医道を学ぶようになったかに関しては、少し検討を要する。履歴書の中には、20歳のときの事歴として、「父医道を起さむとする志あるを知り大に喜び、書を伝えて曰、汝意を変ずる事なく、家祖を尊び廢れたる神道を起し仏道を破り、以て皇室を守るべし」とある。経彦自身は、医道への関心は、20歳、あるいはその少し前に生じたと述べているのである。これは、母の死の12年前のことである。まだ父も生きていた。また、20歳代には、各地を巡歴しているのだから、医道を志したのは、忠孝の間で悩み、外出を極力控える以前のことということになる。母親の病気がちなことが、医道の研究を熱心にさせたにしても、それ以前から医道への関心が強くあったと考える方が適切であろう。

彼は、自らの医道を「皇国医道」と名付けた。これは、幕末に、国学者で神道家の権田直助(1809-87)らが唱えた皇朝医道、あるいは古医道というものと、目指すところはほぼ同じであったと思われる。⁽²²⁾すなわち、中国あるいは朝鮮の医学が日本にはいつてくる以前の、わが国固有の医道を再興しようとするものであった。経彦が依拠した書は、『神遺方』⁽²³⁾と『大同類聚方』⁽²⁴⁾であったというから、そう判断してよいであろう。『神遺方』も『大同類聚方』も、すでに佚書となり、今日では、幕末に伝えられていたものは、偽書であるとされている。しかし、『大同類聚方』には、幾種類かの部分的写本があり、現在、

かなり復元されたものが刊行されている。経彦が依拠したのがどの写本か、分からないが、もし、後述のように、彼が御典医であった錦小路家に入門したというのが事実なら、その期間にこれらの書に接した可能性がある。

ところで、皇国医道を提唱した経彦は、幕末に治病活動を行っているが、これに宗教的意義を認めていたという記述が、『教祖様の面影』にはある。すなわち、人を救うに二つの道がある。上根の民は直ちに道を説いて救うことができるが、下根の民に神を知らせる動機は多くは病である。愚かにして迷っている多数の者を救うのは、教法の主な目的である。従って、神が自分に病の性質や患者の現状を検査させたのは、救済の参考とさせるためであったと悟り、祈禱と施薬とを兼ねた活動を行ったというのである。

治病活動に対する、このような了解の仕方が、すでに当時の経彦にあったものか、あるいは、後年そのように意義付けを行ったのか、はっきりしない面がある。もし、前者であれば、村上重良の言うような布教活動とまではいなくても、すでに幕末において、宗教行為に近い活動が始まっていたとみることができる。後者であったとしても、やや神秘的な色彩を帯びた治病行為がこの時期に開始されていたと考えられ、単に思想面だけではなく、実践面でも宗教家としてのルールは敷かれつつあったとすることができる。

経彦が医道を学んでいたということは、教団外の資料にも、傍証となるものが残されている。慶応年間に、小倉藩は、幕末の佐幕派と尊王派との争いに巻き込まれるが、経彦はこれに軍医としての参加したことになる。おそらく、皇国医道を学んだという経験を買われたのであろう。

さて、この戦争中のことに関して、「調査事項報告」には、「島村志津摩ノ隊ニ属シ軍医補ヲ命セラレ小倉戦場ニ出陣シ九月小隊長トナリ数度戦役ニ服スト雖モ戦ハ元ヨリ好ム処ニ非ス戦止ム共ニ家ニ帰り皇医ニ従事ス」とある。ここに記してあるように、経彦は好戦的な人物ではなかったと思われるが、とって反戦的でもなかったようだ。武勇伝的な行為もあったようである。

『豊前叢書第一巻』⁽²⁶⁾には、この戦争の渦中に経彦が登場してくる箇所がある。すなわち、経彦が、小倉藩の中老であった、島村志津摩に重要な伝言を伝えるため、長州藩の厳しい警戒の目をくぐって、⁽²⁷⁾ 単身島村の陣営にのりこんでいく場面である。この箇所では、経彦は、「予て錦小路家の門に在りて、皇漢の医術を再建せん事を議り、西田直養の門に入り国学を修め居りし」と紹介されている。また、「生来攘夷勤王の志深く、長門の吉田松蔭及び筑後其の他勤王の諸藩士と志を通じ、皇道を説くに因りて、佐幕中心たる小倉藩士に嫌疑せらるる事有りし」とも述べられている。この記述によって、当時、経彦は医師として通用していたことが分かり、また、勤王志士と目されていたことも分かる。この頃、経

彦は30代前半、なかなか血気盛んであったことがしのばれる。

慶応年間には、母が死に、また師の直養も死んでいる。個人的にもさまざまな衝撃のときであったが、同時に藩の戦役に巻き込まれ、社会の動乱をもっとも痛切に体験したときでもあった。この時期は、かなりの執筆がなされ始めた時期でもある。何かをしなければならぬという思いが、高まりを見せたときとも考えられる。自らの取るべき道が未だはっきりと描かれていなかったとしても、宗教家としての自己イメージは、かなり明確になってきていたのではなかろうか。

7. まとめ — 宗教家経彦誕生の前奏曲

伝記というのは、事実に対する作者の解釈活動が加わっている。これに加えて、経彦の伝記の場合は、経彦自身の解釈が、作者の解釈に大きく関与しているということに注意しなければならない。それ故伝記の中には、自らの生涯に対する自己了解とでも呼ぶべきものが開陳されていると考えられよう。そうした目で伝記を眺めるなら、彼の宗教家としての道は、明治8、9年の段階で突然に開かれたわけではなく、言わば、なるべくしてなった道であると、経彦自身は理解したと言える。

かくして、明治8、9年の体験が、かなり重要な意味をもったとしても、それは、経彦をそれ以前とまったく異なる道を歩むようにいざなったという意味においてではない。むしろ、それまでに萌芽的状態であったものを、一斉に開花させたという意味において重要であったとみなすべきであろう。

幕末期に彼がとっていた活動のうち、後年の宗教活動に直接的につながるものは、著作活動と治病行為である。ただ、この頃の著書の内容は、宗教的なものには限られず、むしろ民俗誌的なものが多くを占めている。彼の心の中でうごめいていたものを、ある具体的な目標を設定して行動に移すというほどには、期は熟していなかったかもしれぬが、著述活動を一つの手段とするという手法は、すでに固まっていた。また、治病行為は、宗教的力に依存した、いわゆる病氣治しとみるよりは、あくまで医道を基盤とするものであったと考えた方が適切である。ただし、この治病活動を通じて、人々の現実の悩みに直接触れる機会を多く重ねたことは、後年の布教活動に少なからぬ意味をもったと考えることができる。

このように、基本的には、経彦が壮年期前半を迎える幕末期までに、彼の宗教思想の基本的部分はかなり確立しており、それが心理的に整合された形で発露したのが、明治8、9年の出来事であったと看做すことが、経彦自身の自己了解に合致する。また、そのとき

の体験は、やはり緩やかな回心であったろうと考えられる。神の代理であるという表現にしても、決して単なるレトリック、あるいは比喩的なものではない。それは、回心の過程で意識化された心の内容であり、それまでの自らの身に生じたさまざまなできごとを、彼なりに解釈した結果なされた、神との関係の位置づけであると捉えられる。

明治以降、とくに明治政府の宗教政策が明らかになってからの、経彦の思想及び行動には、いくばくかの変化ないし展開があらわれる。それについては、稿を改める必要があるが、例えば、組織を結成し、自らの理念を実現していこうとする方策を選んだのは、その最たるものである。活動範囲が首都圏を含む全国的な規模のものになっていったのも、展開の一つである。けれども、こうした運動の変化・展開も、単なる明治政府の神道重視の宗教政策への便乗と捉えるべきではないことだけは、指摘しておかなければならない。

(註)

- (1) 栄名井聡翁の名前の表記については、坂名井、聡翁、広聰などがあるが、ここでは国学者伝記集成(栄名井聡翁)に準拠した。なお、栄名井聡翁については後述する。
- (2) 佐野高嶺編、神理教独立二十年祭奉祝会発行。(発行年不詳)。
- (3) 回心物語という概念については、拙論(島菌進と共著)「回心論再考」(上田閑照・柳川啓一編『宗教学のすすめ』、1985年、筑摩書房、所収)を参照のこと。
- (4) 昭和7年、森山書店刊。
- (5) 昭和10年、日本学術研究会刊。
- (6) 昭和14年、大興社刊。
- (7) 『日本宗教史講座』、1959年、三一書房刊、所収。
- (8) 昭和57年、吉川弘文館。
- (9) これは、講演を筆記したもの(神功大教会所蔵)を大正2年に刊行。昭和41年教祖60年祭の記念として再刊。
- (10) 大正14年、神理教大教庁宣教課刊
- (11) 昭和5年、神理教本院刊。なお、この冒頭に収められた経彦自身による履歴は、もと『桃舎履歴』に記されてあったものである。
- (12) これは、ときの内務省からの各教団に対する教義の照会に対して提出された回答で、神理教の起源・沿革と、いわゆる「巫部系譜」の説明がある。とくに64代佐野左衛門重足より77代経彦までは、教行ないし教丁にわたる説明がある。
- (13) 「東行記」「田川紀行」「崎山紀行」は、『神理教祖御日誌第一巻』に収められている。また、「熊本日誌」「三しまめぐり」は、『教祖御日誌第二巻』(昭和28年、神理教大教庁教書刊行会刊)に収められている。なお、機関誌『神理』には、「千代田日記」が連載されたことがある。
- (14) この話が史実に基づいているのかどうかは確かではない。ただ『福岡縣企救郡誌』(伊東尾四郎編、昭和47年、名著出版)には、造化天神社についての次のような記述がある。「往古徳力山ニ鎮座アリテ、天在諸神祠又造化大神宮ト称シ、豊国巫部奉仕スル処タリ。永禄十二年豊前国京都郡松山城主杉氏再建。慶長三年三月小倉城主森壱岐守再建。其後細川越中守忠興朝臣信仰厚ク、殿宇祭器等寄付アリ。細川氏肥後ニ移転後、社後廃頽シ、慶安年間今ノ地ニ移転ス。所蔵ノ神鏡

裏ニ天平三年トアリ。以テ当社ノ古社タルヲ徴スルニ足ル。」（111頁）

もっとも、この『福岡縣企救郡誌』は、佐野経彦の著書を参考にしてあり、記述内容から見て、この箇所は経彦の記述をそのまま採用したと思われる。従って、造化天神社にまつわる話は、すべて経彦から発していることになる。ただ、細川忠興が神社への崇敬が篤かったことは確かなことである。

- (15) 『神道学』56, 神道学会, 昭和43年。
- (16) 巫部の道統として、『調査事項報告』に挙げられているのは、初代饒速日命から佐野経彦に至る77代である。第9代に、物部膽昨宿称の名があり、物部姓がしばらく続く。17代に、巫部兄久志宿称の名があり、その後、巫部姓が続く。佐野姓になるのは、64代の、佐野左衛門重足以後である。
- (17) 四男と記載したものもあるが、四番目の子と解する方が通説のようである。
- (18) 小倉市役所編『小倉市誌上巻』（昭和47年、名著出版刊）には、慶応二年の小倉藩の知行帳が記載されているが、そこでは、「御使番」のところに「式百五拾石 西田庄三郎」とある。
- (19) 『福岡縣篤行奇特者事蹟類纂全』（福岡県文化会館、明治29年刊）には、「文久年中病テ没ス」となっている。「日本人名大事典5」（1938年刊、1979年平凡社より覆刻）には、元治2年（1865）説と文久3年（1863）説とを挙げてある。『大阪人物誌（正）』は文久3年説である。しかし、『名家伝記資料集成』、『豊前人物誌』、『福岡県先賢人名辞典』（三松荘一編輯、文照堂書店刊、昭和8年刊）『明治維新人名辞典』（吉川弘文館、昭和56年）などは、慶応元年（1865）説を掲げている。『神理教祖御小傳』では、慶応3年（1867）となっている。だが、『神理教祖御日誌第一巻』（前掲書）によれば、慶応元年となっている。『神理教祖御小傳』が誤植かと思われる。
- (20) 『歴史地理』15-1及び15-2, 明治43.1.1, 及び同2.1所収
- (21) 小倉市役所編『小倉市誌下巻』（昭和47年、名著出版）によれば、蒲生八幡神社は、戦前郷社であった。企救村にあり、多紀津媛命、大山祇命、品陀和氣命を祀る。
- (22) 富士川游は、『日本医学史』（1904年、裳華房刊）の中で、古医道について、次のように述べている。「所謂古医道トハ、皇国ノ医道ヲ古ニ復スルノ義ニシテ、（中略）コノ期ニ至リテハ専ラ和方ヲ以テ家ヲ成スモノアリ、（中略）蓋シ和方ト称スル一派ハソノ趣旨モト古方・後世・蘭方ヲ除キ、専ラ皇国ノ方ニ依リテ、治則ヲ立テントスルニアレドモ、而カモソノ根拠トスルトコロハ大同類聚方ニアラザレバ、則チ神遺方ニ外ナラス。」
- (23) 『神遺方』は、11世紀に、丹波雅忠が撰した古医書で、3巻からなつたとされるが、佚書となっている。
- (24) 『大同類聚方』は、大同3（808）年、出雲廣貞、安倍眞直らが勅命を受けて撰した古医書で、全百巻から成る。
- (25) 山田重正『典医の歴史』（昭和55年、思文閣出版刊）によれば、錦小路家は、平安朝以来、和氣氏と共に官医の宗家であった丹波氏より、16世紀に分かれた家柄で、長く典薬頭を勤めた。経彦が出会った可能性があるのは、5代の頼易か、6代の頼徳である。しかし、錦小路家は、明治にはいって、医業を廃止しており、子孫の錦小路頼昭氏に問い合わせたところ、門人帳のようなものはないとのことであった。従って、経彦がどの程度の関わりをもったかは不明である。また、神崎四郎『惟神道の躬行者権田直助翁』（昭和12年、阿夫利神社社務所刊）によれば、皇朝医道を研究する直助は、錦小路頼易と会い、『神遺方』などの医道書を閲覧させてもらったという。
- (26) 豊前叢書刊行会編、昭和56年、国書刊行会刊

(27) やや長い引用となるが、経彦のこの頃の行動について教外の人間が記している貴重なものであるので、この箇所を掲げることとする。

茲に豊前国企救郡蒲生八幡宮の大官司高山丹波守、全郡徳力の民佐野右橋は、予て錦小路家の門に在りて、皇漢の医術を再建せん事を議り、西田直養の門に入り国学を修め居りしが、生来攘夷勤王の志深く、長門の吉田松蔭及び筑後其の他勤王の諸藩士と志を通じ、皇道を説くに因りて、佐幕中心たる小倉藩士に嫌疑せらるる事在りしが、(中略)

又小笠原家の祖先忠真卿も幾度も成らせられし家にて、上は神功皇后の餅飯の神鏡、弘安の異人鏡の類許多の遺物あるを以て、此の度、長門追討の諸藩士此の事を伝え聞き、日毎に古物拝見を申入るる者多き中に、長岡監物屢々来たり親しく交わりを結ばれしが、此の度突然陣払いと成るに就いて、高山丹波守と佐野右橋に示さるるに、今後小笠原の一手を以て、此の地に於て防戦甚だ至難ならん、若し島村志津摩殿開城為し給わんには、全軍を率いて我が国に来たり給わば、必ず粗略なく親切を以て御引受け申さん、との一言を伝え参らせよと託せられたりと雖も、小倉立退の後、所在分明ならざりしに、頃日、金辺峠の陣に在りと聞き、佐野右橋は悦び勇んで金辺峠の陣営に急ぎ行く途中、警戒の藩士之を咎め、何れに行く者なるかと問糺せるに、我は徳力村の医師佐野右橋なり、大将島村殿に重要な用事ありて通行する旨、答えるにより、其の旨重役に達すべしと藩士に誘われ関門に到れば、逆茂木厳しく結び阻らし、門内には年若き侍二、三十人詰切り、三、四人右橋に立向い、汝は何用あつて爰に来りたるや、との問いに対して、自分は大将島村殿に拝謁して、直々言上す可き重大なる仔細有つて推参したり、と申すを聞きも敢えず、容貌胡乱なり、汝鑑札を所持せざる以上は繩を掛けよ、と藪くを遮りて、自分は捕縛せらるべき罪を犯したる覚えなしと、抵抗する始終を島村志津摩障子越に聴き、今関門に於て論争する者あり、誰れなるやと問われたるに、其の傍らに神官川口某在りて、彼は徳力の医師西田直養の門人ならんと申述べれば、兎に角、其の右橋とやらん者を此の方の面前に通せ、との一言に忽ち論争止め、侍に導びかれ大将の前に出でたるに、島村志津摩、右橋に対して笑釈して物や和らかに来意を問るるに、始めて心を安んじ、口を開き秘密に属する由を申せば、左あらば裏縁に廻れとありて、陣営の裏手に呼入れられ、今日志津摩に申入れ度き仔細は何事なるか、との間に答えて、長岡監物より託せられし次第逐一申述べれば、遠路の所大儀なり、と来意謝し、今一応、諸士列座に於て述べ呉れよとの言葉に従い、表に廻り諸士居並びたる席に於て、前条を繰り返して申述べれば、島村志津摩喜悦満面に溢れ、汝は長藩の警戒厳重なる可きに、如何にして其の警戒線を潜りたるや、との尋ねに、去る三日、報国隊の一部隊来たりつれども、其の後兵士の来るを見ず、と答ゆるに、大将笑みを含み、明日は新町に押し寄せ敵を撃つ可し。必ず他に洩すべからず。明日乗り出せし時再会せん、緩々休息致す可し。と慰勞の辞を述べられ帷幕の内に入られたり。(148~9頁)

島村志津摩というのは、小倉藩の戦いでかなり活躍した人物である。右橋とあるのは、もちろん経彦のことである。『豊前叢書第一巻』に収録されたこの部分は、内山円治の「小倉戦史」が元である。内山は、嘉永4(1851)年の生まれで、慶応元(1865)年、わずか15歳のとき、企救郡石原町の庄屋を勤めた。この年に「豊長戦争」が起こった。晩年、彼はその当時の見聞をもとに「小倉戦史」を著したとされる。従って、この記述も、かなり史実に近いものと思われる。

追記 本研究は文部省科学研究費(一般研究(B)「近代日本の国家と宗教に関する実証的研究」)による研究成果の一部である。